

「新しい東北」官民連携推進協議会

**令和2年度
岩手県意見交換会(第3回)**

事務局提出資料

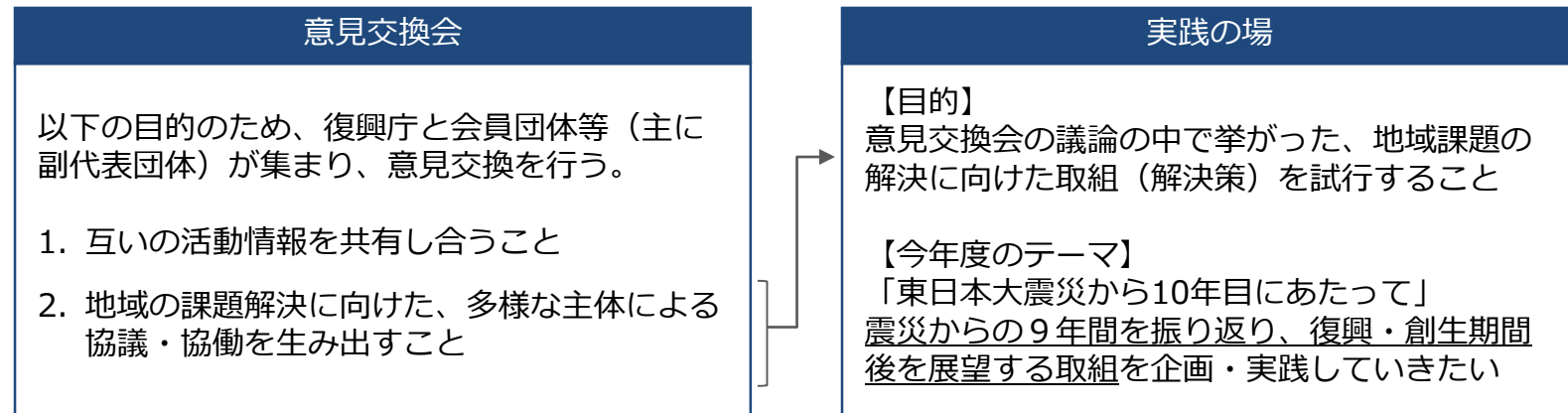
「新しい東北」官民連携推進協議会事務局

2021年3月4日

1. 意見交換会の概要
2. 実践の場の概要
3. 実践の場の開催結果
 - (1) 参加者の特徴
 - (2) 座談会の議論内容
 - (3) 満足度
 - (4) 目標達成度
 - (5) 考えたこと・学んだこと
 - (6) 参加者へのフォローアップ
4. 次年度の協議会・意見交換会について
5. 意見交換

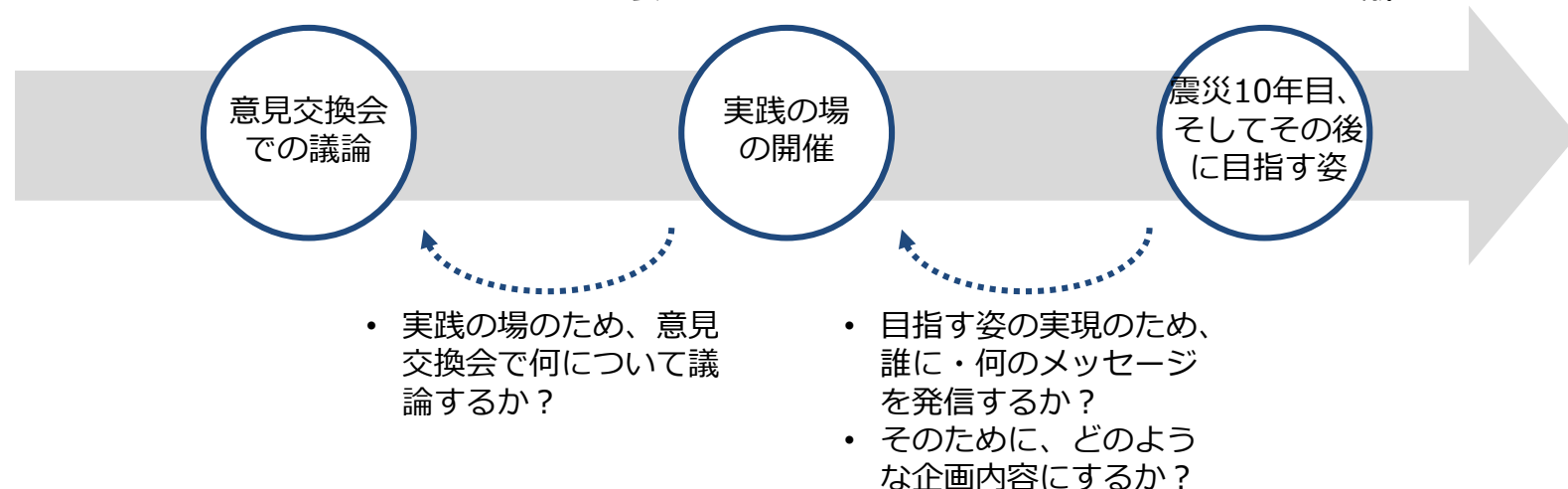
今年度は東日本大震災から10年目、そしてその後に目指す姿を念頭に置き、実践の場の企画や、そのための意見交換会での議論を組み立てていきます。

■ 意見交換会、実践の場とは



■ 今年度の方向性

東日本大震災から10年目、そしてその後に目指す姿を念頭に置き、実践の場の企画や意見交換会での議論を組み立てる



● 2. 実践の場の概要

これまでの意見交換会の内容を踏まえて、下記の内容で実践の場を開催しました。

開催日時	2021年1月23日（土）14:00～16:30	開催場所	陸前高田市（陸前高田グローバルキャンパス）
タイトル	いわて沿岸とつながる交流会 －これまでの10年を未来の力に－		
企画目的	岩手県では、東日本大震災から10年間、様々な人との出会い、つながりが生まれ、復興活動が行われてきた。これまでの復興活動の思い出や、伝承していきたい大切な記憶・教訓を振り返り、共有し合い、また、教訓・つながりを活かして今後取り組みたいことや目指したいことのアイデアを生み出すことを目指す。そして、今後の未来に向けて、いわて沿岸とのつながりをさらに広げる・深めるきっかけの場になることを目的とする。		
実施内容	<p>14:00～ 開会挨拶・趣旨説明</p> <p>14:05～ インプットトーク</p> <ul style="list-style-type: none">● (株)津田商店 常務取締役 小笠原 正勝 氏● (一社)三陸ひとつなぎ自然学校 代表理事 伊藤 聡 氏● (有)宝来館 代表取締役社長 岩崎 昭子 氏 <p>14:35～ 座談会</p> <ul style="list-style-type: none">● 釜石・沿岸中北部チーム（地域の賑わいづくりなど）● 気仙地域チーム（防災・伝承など） <p>16:15～ 全体発表（2チームの意見交換内容発表）</p> <p>16:25～ 閉会挨拶</p>		
規模	【登壇者・参加者】30人 （現地15人＋オンライン15人）		

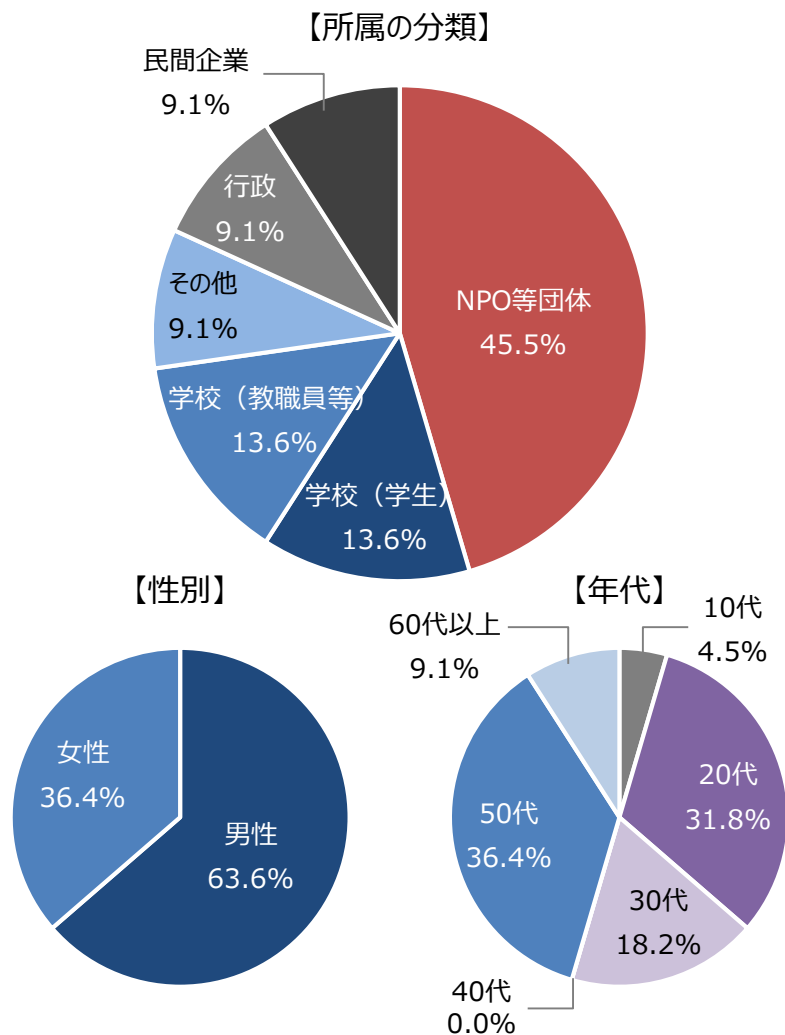
● (ご参考) 当日の様子



● 3. 実践の場の開催結果 — (1) 参加者の特徴

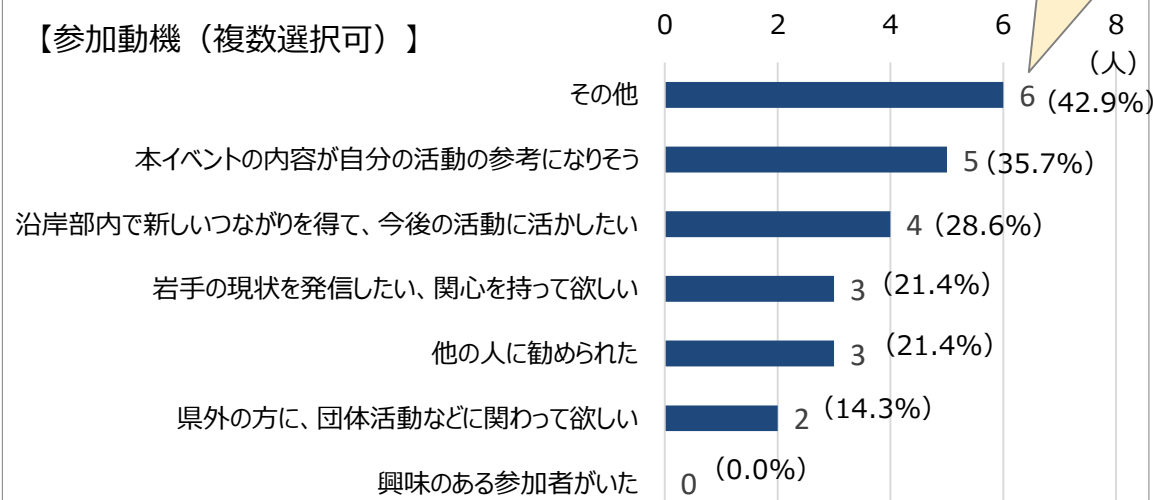
アンケート回答者22人の内訳を見ると、産官学さまざまな所属の方が参加して下さったことが分かります。このうち、県内在住の約4割は「本イベントの内容が自分の活動の参考になりそう」、県外在住の半数は「岩手の活動に何かしらの形で関わりたいから」という参加動機でした。

参加者（回答数：22人）



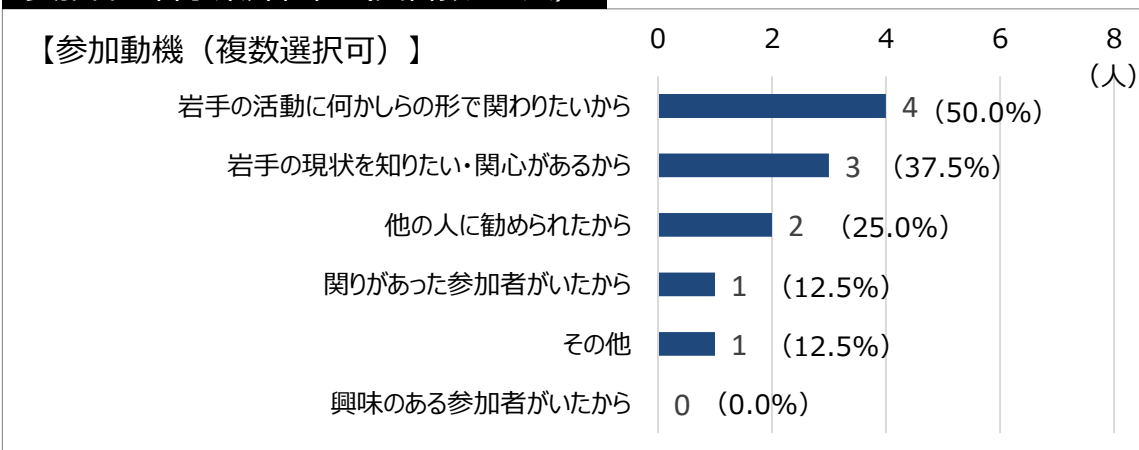
参加者：岩手県内在住（回答数：14人）

【参加動機（複数選択可）】



参加者：岩手県外在住（回答数：8人）

【参加動機（複数選択可）】



● 3. 実践の場の開催結果 — (2) 座談会の議論内容 [釜石・沿岸中北部チーム]

釜石・沿岸中北部チームでは、以下のような発言・議論がありました。復興の次のステップに向けて進むことや、地域を越えた連携の創出・強化を望む声が多く挙がりました。

当日の発言・議論

■ 振り返り

つながり

- ・ 他の地域との情報交換や地域活性化に取り組んだことで、新たな人とのつながりが生まれ、協働による成果を生み出すことができた
- ・ 教育を通じて、地域の人づくりの面から復興に貢献してきた
- ・ 子どもたちは遠くの人とつながることで、視野・世界観が広がった
- ・ 中の人と外の人との強固なつながりをつくることなど、もっとできたことがあったと反省することも多い

変化
工夫

- ・ 10年が経ち、団体の活動目的・内容も変化してきている
- ・ 専門的なことが分からない地域住民でも前向きに議論を続けられるような工夫が大事

■ 今後に向けて

双方向

- ・ より良い未来を考えるために、他の地域や分野の人と情報交換・連携をする「3月12日」を始めたい
- ・ 一方向ではなく、今後は双方向で交流することが必要
- ・ 現地に直接行けなくても、岩手と関わり続けたい

具体化

- ・ 過去に始めた取組を継続し、次のステップに移ることができるかが10年目の課題であり、つながってきた人と一緒にできることを探っていきたい（RWCの際に作ったブドウ畑をもとに連携を検討）
- ・ 地域資源の「食」と「観光」に注目して起業し、さらに地域内の産業とコラボしていきたい
- ・ 県外の団体が求めている人脈や場づくりを、県内の団体と連携することで実現（県内施設に子どもを集め、関東の学生とオンラインで交流）

今後の展望・課題

✓ 地域状況・課題の変化を捉え、次のステップに進む

- ① 双方向のコミュニケーションの実現に向けて
→「震災経験を一方的に伝える」から「他の地域・分野の人と相互に情報交換する」状態を目指す
- ② 地域の強みを何と捉えアクションするか
→「新しいことを幅広く始める」から「既存の取組を継続する、他と組み合わせる」動きへの変化

✓ 地域を越えた連携の創出・強化

- ① 時間が経過しても関心を寄せてもらえる強固な関係づくり
- ② 岩手に直接来れない人たちとのコミュニケーション強化に向けたオンラインを活用したイベント検討等
- ③ 各団体がもつ強み（情報・ネットワークなど）を活かした連携づくり

● 3. 実践の場の開催結果 — (2) 座談会の議論内容 [気仙地域チーム]

気仙地域チームでは、以下のような発言・議論がありました。伝承・防災教育の発信の難しさや、若い世代が地方で暮らす難しさといった課題が共有され、今後の展望について様々な意見が挙がりました。

当日の発言・議論

■ 振り返り

行動

- ・ ボランティア活動を通じて、写真洗浄の活動を伝えている
- ・ 復興支援で写真洗浄の活動に出会い、6年かけて被災した写真洗浄を終え、他の災害・被災した写真洗浄の活動に取り組む
- ・ 周りへの発信に向けて、自分が現地に入ることに意義があると思ひ、移住を決断

意識・目的

- ・ 震災を他人事ではなく、自分事として捉えてもらえるように活動
- ・ 災害に向けて備えないといけないという意識を持ってもらうことが防災教育の目的

現状

- ・ 現在も200名ほどが仮設住宅に住んでいる現実
- ・ 地元で震災の風化が進んでいると感じる

■ 今後に向けて

発信

- ・ 災害を自分事に捉えてもらうための発信方法を継続的に試行錯誤
- ・ 地理総合の科目が必修化となり、防災教育がキーワード（教育委員会の壁があり、被災地での経験を子供に伝える機会がない）

産業化

- ・ 地域産品を食べに来るなど地域に来てもらうためのきっかけ作り
- ・ 楽しいことも発信・体験してもらうことが大事
- ・ 他の被災地との横のつながりが大事
- ・ ボランティアだけではない関わり方の検討の必要性
- ・ 地域でしかできない産業創出が必要であり、災害伝承・防災伝承を地域産業にする
- ・ 若い世代が暮らしていける環境づくりの必要性

今後の展望・課題

✓ 伝承、防災教育の発信

（震災を経験していない小学生の増加）

- ① 震災を自分事化にするために必要なこと
→ 発信の仕方、内容を継続的に検討
- ② 防災教育の実施に向けて
→ 学校教育の防災教育において、オンライン活用（授業で被災経験者の発言を盛り込む）
- ③ 発信先のターゲット、発信方法
→ 若い世代への発信に向けて、学校と地域を結ぶ場所づくり
- ④ 発信する上での工夫すべき点
→ 楽しい観点も盛り込む工夫、地域の産品や観光PRから関心をもらってもらい、まずは地域に来てもらう

✓ 若い世代が地方で暮らせる環境づくり

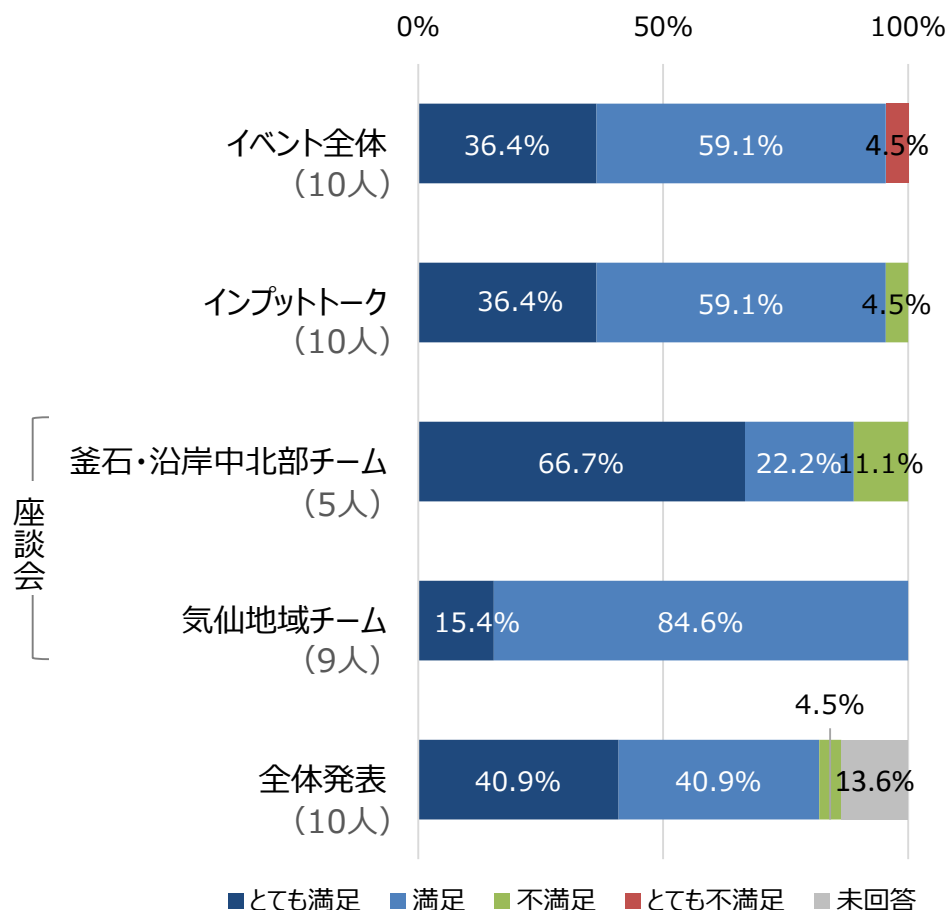
（知名度は上がったが、地域所得は未改善）

- ① 地域でしかできない産業創出に向けて
→ 災害伝承、防災伝承を産業にする

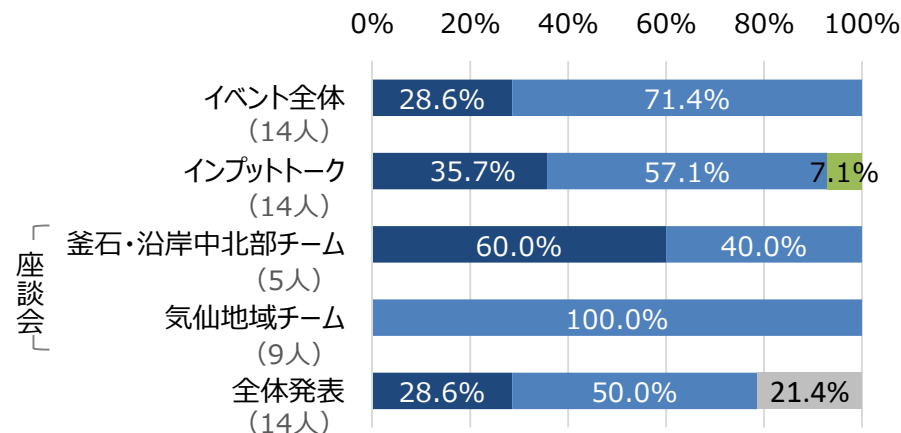
● 3. 実践の場の開催結果 — (3) 満足度 1/2

イベント全体に対する参加者の満足度は「とても満足」が36.4%、「満足」が59.1%でした。座談会は、90%以上の方に満足いただくことができました。

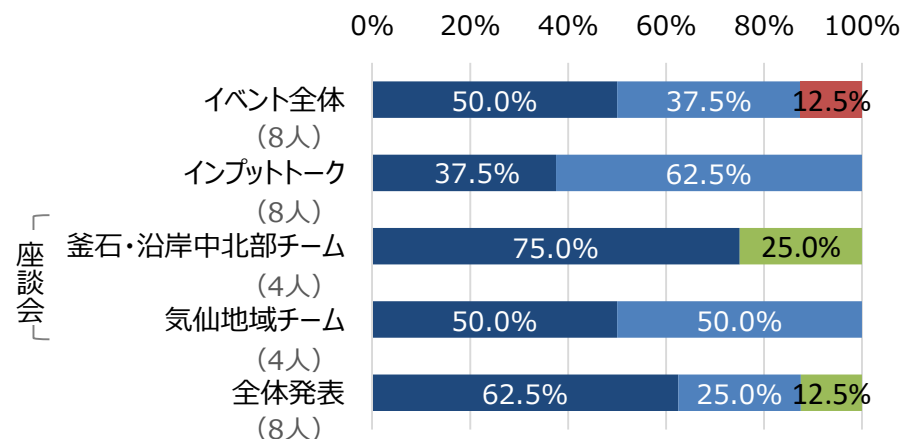
参加者全体（回答数：22人）



岩手県内在住（回答数：14人）



岩手県外在住（回答数：8人）



● 3. 実践の場の開催結果 — (3) 満足度 2/2

満足度の理由では、様々な団体とつながることができたという声や、いろいろな活動者からの話を聞いて良かったという声をいただきました。

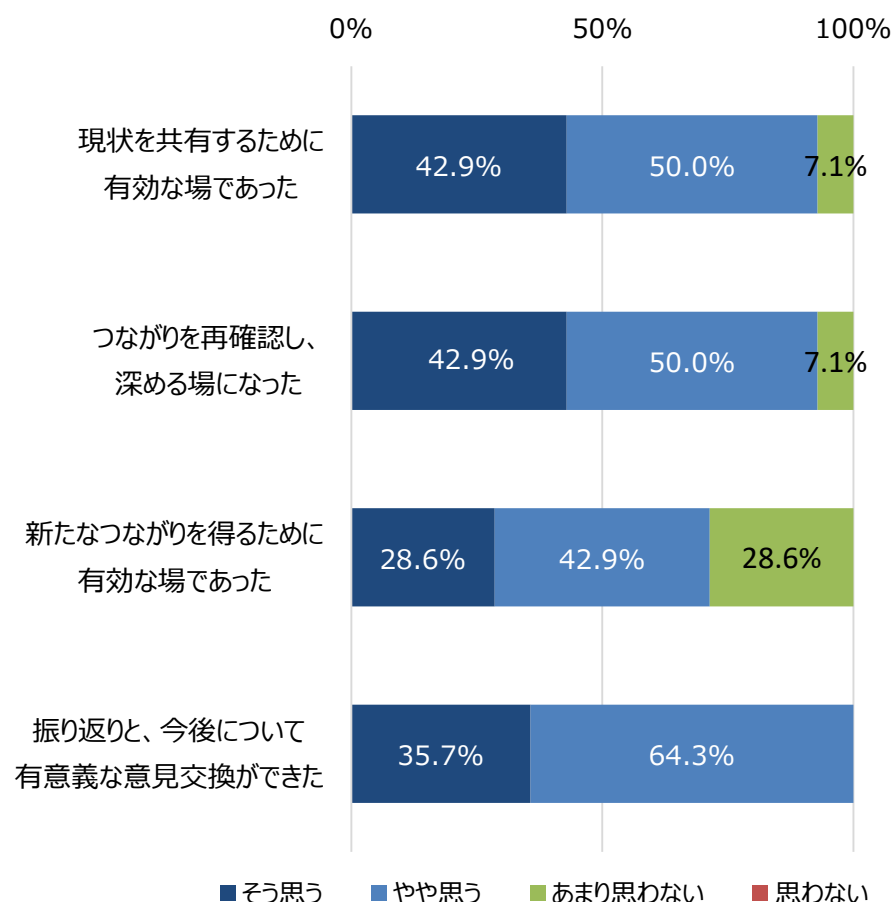
【満足度の理由】(要約を掲載)

	岩手県内在住	岩手県外在住
全体	<ul style="list-style-type: none"> 沿岸地域に関わっている方々の話を聞いて、今後の関わり方を考える参考になった 普段企業の中だけにいると周りが見えなくなる事があり、気づきの場になった 	<ul style="list-style-type: none"> 概ね本イベントの趣旨に沿った内容だった 直接行けなくてもオンラインで会える イベントの目的が最後まで不明瞭だった
インプットトーク	<ul style="list-style-type: none"> 時間が短かった 座談会の気仙地域チームには、直接的なインプットだったかは疑問 	<ul style="list-style-type: none"> もう少し話を聞きたかった
座談会 (釜石・沿岸中北部地域)	<ul style="list-style-type: none"> 今までを振り返り、今後につながる良い機会になった 各コーナーの時間が短かったが、内容の濃いものを共有できた なかなかつながる機会がない団体を知ることができた 	<ul style="list-style-type: none"> 岩手県内の様々な団体の方とつながることができた 今後連携した活動も模索できるのではないかと感じ、交流を継続できたらと感じた
座談会 (気仙地域)	<ul style="list-style-type: none"> 懐かしい人の顔が見れてよかった 様々な方の話を聞くことができ、非常に有意義だった 県内外の様々な復興に携わる方々の話を聞くことができた 座談会のテーマが見えにくく、共通のテーマに絞っても良かったのではないか 問題点は整理されたが、具体的な行動の方向性が見えなかったことが残念 人数が多く、一人当たりの時間が短くてまとめるのが難しかった 	<ul style="list-style-type: none"> 現状の岩手の声が聞けて参考になった
全体発表	<ul style="list-style-type: none"> 全体発表でそれぞれの座談会の内容報告があり良かった 	

● 3. 実践の場の開催結果 ― (4) 目標達成度 [岩手県内]

企画目的の達成については、参加者のうち7割以上が「そう思う」「やや思う」との答えでしたが、座談会のグループの分け方については改善点が複数挙がりました。

岩手県内在住（回答数：14人）



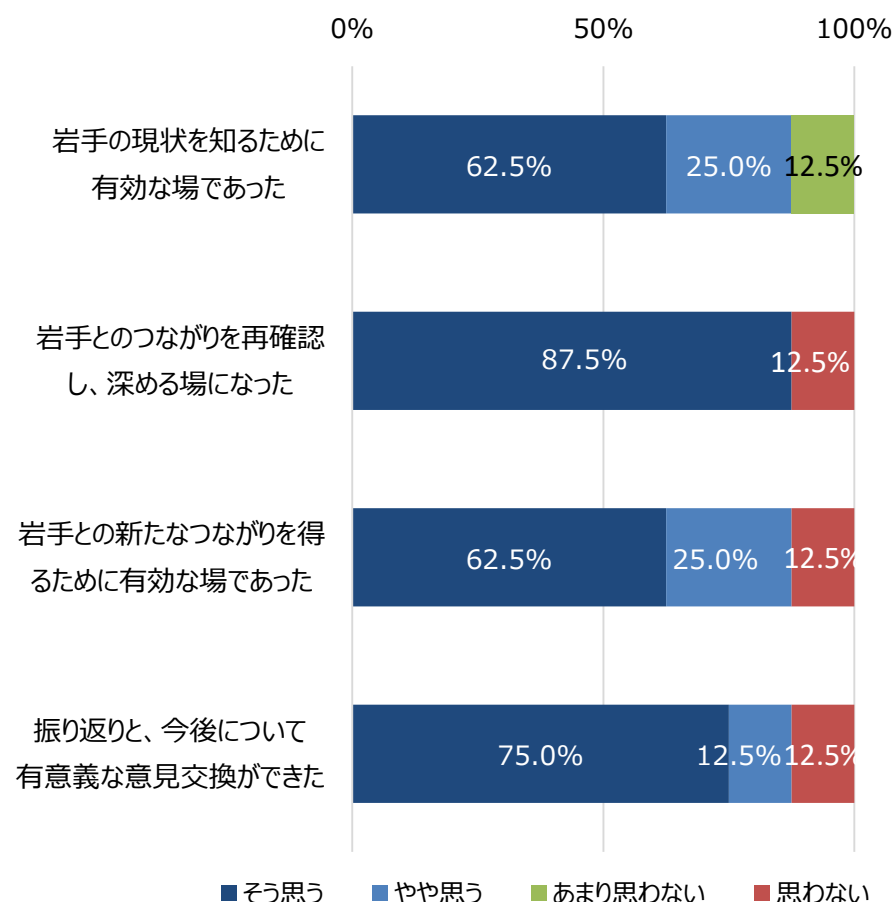
【よかった点・改善点】（要約を掲載）

岩手県内在住		
よかった点	全体	<ul style="list-style-type: none"> 今後どのような活動をしていくのか考える参考になった オンライン開催との併用で遠方からでも参加できて良かった
	座談会	<ul style="list-style-type: none"> 2グループに分けたのは良かった、濃い話し合いをするためには、丁度よい人数と時間だった 業種・地域様々な視点からの声が聞けた 参加者の想いが伝わる場だった 多くの人の懐かしい話を聞くことができた
改善点	全体	<ul style="list-style-type: none"> タイトなタイムスケジュールで、慌たしさがあった 参加者がもう少し多くても良かった
	座談会	<ul style="list-style-type: none"> もっとくだけたざっくばらんな意見が言える雰囲気だと良かった キャッチボール的に会話ができるように、小規模なグループでも良かった エリア、活動分野ごとのグループ分けはもう少し細かく検討する余地があったのでは オンライン参加者とのやりとり（交流）はあまりできなかった印象

● 3. 実践の場の開催結果 ― (4) 目標達成度 [岩手県外]

企画目的の達成については、参加者のうちおよそ9割が「そう思う」「やや思う」との答えでしたが、座談会のグループの分け方や参加者間の双方理解、つながり創出に関する改善点の意見もありました。

岩手県外在住（回答数：8人）



【よかった点・改善点】（要約を掲載）

岩手県外在住		
よかった点	全体	・ オンライン開催との併用で遠方からでも参加できるのが良かった
	座談会	・ 様々な立場での想いを聞いた
改善点	全体	・ リアル参加ではないと他の参加者とながりにくい（名刺交換ができない）
	座談会	<ul style="list-style-type: none"> ・ 他チームの話も聞きたかった ・ テーマに沿った参加者の精選でさらに良い議論が展開できると思う ・ もう少し小規模で複数のグループでも良かった ・ 自己紹介の時間を長くすれば、座談会のメンバーについて深く知れたと思う

● 3. 実践の場の開催結果 — (5) 考えたこと・学んだこと

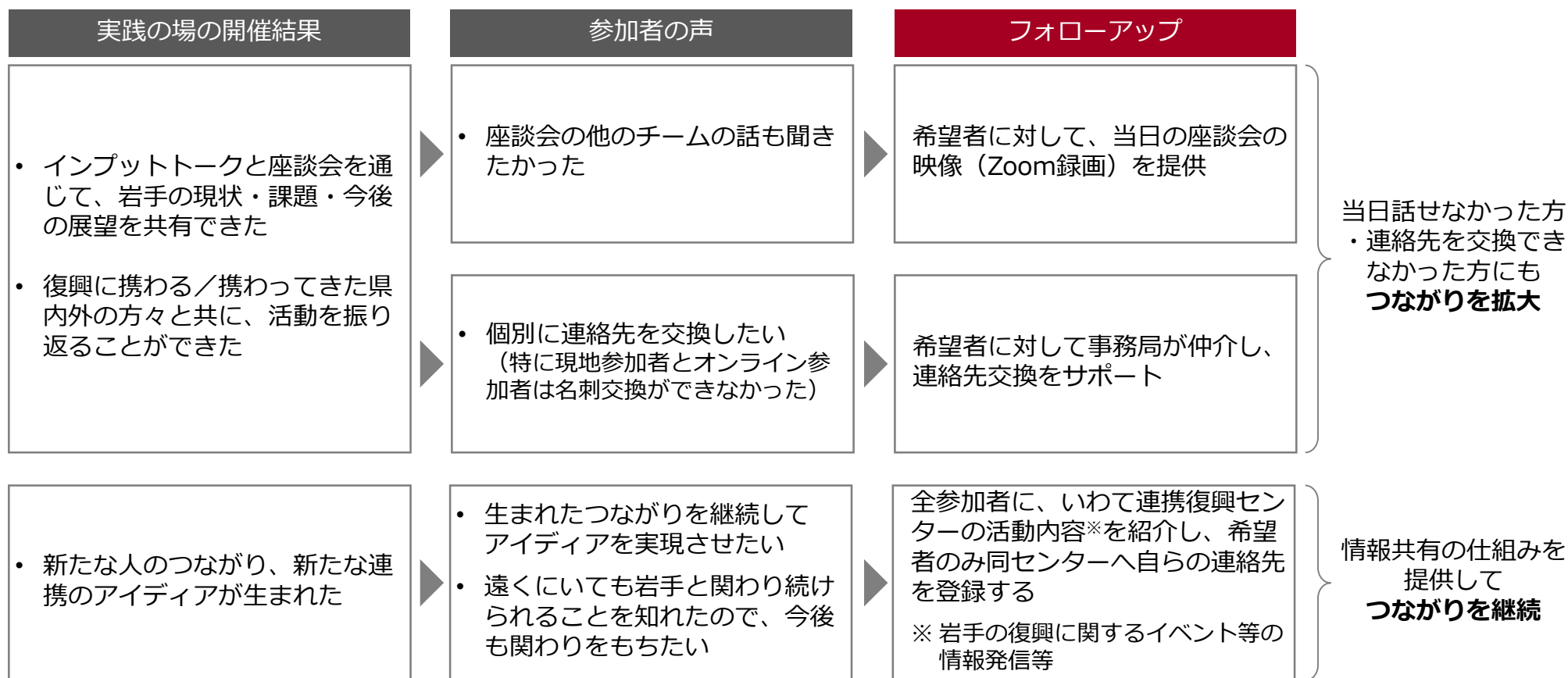
参加者が他者との意見交換を通じて、今後に向けた新たな気づきや、考えが生まれたことがわかります。

【イベントを通じて考えたこと・学んだこと】（要約を掲載）

参加した座談会	岩手県内在住	岩手県外在住
釜石・沿岸中北部 チーム (地域の賑わいづくり など)	<ul style="list-style-type: none"> 「若い世代が戻ってくる」ような環境づくりを進めるより、「新しい人が参入したくなる」サポートや支援が必要 県内外に関わらず沿岸と繋がってる方々がいることに感謝 自分たちの活動がある程度発信できたが、もう少し目に見える形で発信したかった 	<ul style="list-style-type: none"> 新しい動きをしている方々を知ることができたのがよかった 被災地を学びの場、挑戦の場にしたいという言葉が印象的であり、被災地をこれからは未来につなげる場所として活用できたらいい 若い力が求められていると実感し、大学生の力が活かせるようなことがあれば、貢献していきたい
気仙地域チーム (防災・伝承など)	<ul style="list-style-type: none"> 10年を通して人々がいかに動き、多くの人とのつながりで構築してきたかを考えさせられた。コロナ禍でつながりの希薄化が進むことが危惧される 被災地に関わるということをシリアスに考えすぎず、楽しい面から入って震災伝承・防災教育について考えることもできる 震災の記憶が少ない学生が増えた。いかに伝えるかを考える時期になったと思う ZOOMを使っでの防災教育の育成 大学生と沿岸地域をつないで、多くの大学生が沿岸の魅力と震災について知ってほしい これまで震災、自然災害に興味を持てなかった人たちにどういった入り口を用意できるかと考える必要がある。食、祭りやイベントといったハードルの低いところから魅力を発信したい 防災や震災伝承の伝え方を考え直す 防災の情報発信だけでなく、避難所等の体験施設を整備し研修施設があれば観光とセットで東北を元気づけられる 	<ul style="list-style-type: none"> 震災を風化させないようにしたい 被災地に限らず 地方創生は重要 街は復興しても人口構成は基本的に変わらないため、先行きに不安を感じている様子がうかがえた 様々なバックグラウンドの立場からの震災、復興、伝承との関わりがあり興味深かった 防災や伝承から入るのではなく、とっつきやすいものや角度から地域との関わりを広げていくという意見などが勉強になった 将来陸前高田市をどのように若者の仕事しやすい地域にしていくか、という話が参考になった 自分のこととして災害をとらえることが大事

● 3. 実践の場の開催結果 — (6) 参加者へのフォローアップ

実践の場の開催後、参加者から「他チームの話も聞きたい」「個別に連絡先を交換したい」「つながりを続けていきたい」といった声が挙がったため、フォローアップを実施しました。



● 4. 次年度の協議会・意見交換会について

次年度は協議会および意見交換会を継続し、これまでに蓄積したノウハウを被災地内外に普及展開する方向性で検討を進めております。

次年度の事業概要（『令和3年度予算概算決定概要』（令和2年12月 復興庁）から引用）

■ 「新しい東北」普及展開等推進事業

「新しい東北」の創造に向けたこれまでの取組を通じて蓄積したノウハウについて 優良事例の表彰やワークショップ等を通じて被災地内外に普及展開するとともに、企業間のマッチングの場の提供を通じた事業連携や専門家派遣等の支援を復興状況等に応じて重点的に実施。

次年度の協議会の方向性

- ・ 「新しい東北」官民連携推進協議会の運営、意見交換会・実践の場の枠組みを用いた議論・推進の取組は継続する
- ・ 被災地内外に向けたノウハウの普及展開に一層注力する
（今年度はノウハウの総括に取り組んだため、この内容をさらに深掘り、広く発信していきたい）
- ・ 意見交換会の開催回数や実践の場の形式についても上記目的に照らし変更要否を検討する
- ・ 事業連携や専門家派遣等の重点施策も継続し、引き続き被災地内の復興支援にも取り組む

● 5. 意見交換

実践の場の開催結果と次年度の方向性を踏まえて、下記3点についてご意見ください。

1. 今年度の実践の場の良かった点や改善点についてご意見ください。

2. 参加者の声（座談会での意見、アンケート回答内容）から、どのような岩手の復興に関する今後の展望や課題が見えてくるか、ご意見ください。
また、その展望や課題を踏まえて、協議会として次年度以降どのようなことをできるか、アイデアをお聞かせください。

3. 上記2.やノウハウの普及展開を実現するために、次年度における意見交換会・実践の場のイメージについてご意見ください。

参考資料

● 宮城県「実践の場」概要

宮城県では振り返り・総括を行うことや、ノウハウ・将来像を検討することなどを目的に、「被災者支援」「産業復興支援」「まちづくり」をテーマに意見交換を行うイベントを開催しました。

開催日時	2020年11月18日（水）14:00～17:25	開催場所	仙台市（せんだいメディアテーク）
タイトル	みやぎ復興官民連携フォーラム ～東日本大震災10年目の今、復興をきっかけに生まれた『連携』の姿とその将来像を考える～		
企画目的	<p>当該イベントでは、東日本大震災から今までに実施した官民連携による先駆的な取組事例に焦点を当て、連携先のNPOや民間企業などともに、振り返り・総括を行うとともに、現在進行形の復興活動や今後の災害対応等に資するノウハウ・将来像を検討することにより、今後なお一層の連携強化に寄与することが主目的である。</p> <p>また、議論の結果を全国にも発信することにより、官民連携の多様な取組を通じて蓄積したノウハウ（特に宮城県内で独自に発展したもの）が他地域での地方創生の取組に応用されること、および宮城県が「連携」を通じて復興・創生に取り組んでいる地域として全国から認知されることも第二の目的とする。</p>		
実施内容	<p>14:00～ 開会挨拶・趣旨説明</p> <p>14:05～ 基調講演 「東北大学復興アクションの軌跡と未来～宮城県内における連携活動を中心として～」</p> <p>14:55～ 分科会</p> <ul style="list-style-type: none">● 被災者支援 「広域支援団体連携推進について」● 産業復興支援 「パートナーシップによる産業の創造的復興に向けて」● まちづくり 「持続可能な防災まちづくり」 <p>16:50～ 総括（3分科会の結果発表）</p> <p>17:20～ 閉会挨拶</p>		
規模	【登壇者・参加者】31人 【傍聴者】約130人（現地43人＋オンライン約90人*）		

*オンライン傍聴者は匿名での参加や途中参加/退出もあり、厳密な人数の特定が難しいため、概数を掲載しています（申込は139人）

● 宮城県「実践の場」概要 ― アウトプット [被災者支援]

被災者支援分野では以下のような発言・議論がありました。多様な関係者による連携や議論の継続、目に見えるアウトプットの発信がノウハウとして抽出されました。

当日の発言・議論の要点

- 災害時に広域支援団体の連携を機能させるために必要なこと
 - ・ **平時から「顔の見える」関係をつくり**、定期的に情報交換・議論
- 令和元年度台風19号発災対応での反省
 - ・ 東日本大震災支援のための団体が他の災害に対応しにくかった
 - ・ みこし連全体として指針が定まっていなかった
 - ・ 組織間で合意形成をできていなかった
- 県災害VC協力体制の再構築に向けた議論
 - ・ 初動の情報収集・発信が重要（外部の支援も受けられなくなる）
 - ・ 多様な視点を入れるため、特定の団体に役割が偏らないようにするため、分担すべき
- 今後の大規模災害に向けた課題
 - ・ **連携体制の構築、役割分担の整理、平時の関係性の再考**
→ **共同で意思決定できる組織をつくる**

ノウハウ

- 震災時における「情報収集・共有」の必要性から集まった多様な立場の関係者が、地域課題解決のため連携を継続
- 共通の目的を設定した上での、定期的な議論
- 今までの取組や反省点を報告書にまとめて発信（目に見えるアウトプット）

● 宮城県「実践の場」概要 ― アウトプット [産業復興支援]

産業復興支援分野では以下のような発言・議論がありました。地域外や若い世代の力を活かすことや、若年層の起業家や牽引役に対しての支援がノウハウとして抽出されました。

当日の発言・議論の要点

	県内	県外から
主体	三陸ホテル観洋 阿部様	フィッシャーマンジャパン 松本様
支援者	(株)MAKOTO 竹井様	NEC 山本様

- 産業復興に重要な役割を果たした「連携」
 - 地域外の力、若い世代の力を活かした連携
- 良い「連携」をつくるために必要な要素・工夫
 - 志の共有
 - 良い人材を結びつけるコーディネーション
 - 使命感の醸成による連携の目標達成
 - 小さな成功の積み重ねによる継続（継続のための粘り強さ）
 - 外の感覚を持ちながら、中の人とつながる
 - ポジティブに考え、周りの協力を得ながらアイデアを形にする

ノウハウ

- Uターンや出向・インターン受け入れによる、地域外の力や若い世代の力を活かした、地域経済活性化のための契機創出
- 若年層の起業や、セクター横断での連携創出を牽引する役割に対し、支援を継続的に実施

● 宮城県「実践の場」概要 ― アウトプット [まちづくり]

まちづくり分野では以下のような発言・議論がありました。意見を引き出し・まとめる工夫、楽しいことを盛り込む工夫、情報格差の排除などの「丁寧なコミュニケーション」がノウハウとして抽出されました。

当日の発言・議論の要点

- 安全な環境下においても防災まちづくりは必要
 - ・ 防災は「困りごと」のひとつ
 - ・ 新しい地域だからこそ、地域・地形を知らない懸念
 - ・ 「被災したからこそその不安」を解消
- 持続可能なまちづくりのために必要な「連携」の工夫
= **住民以外も巻き込んだ「丁寧なコミュニケーション」**

【気仙沼市鹿折】 クチだけでないモデル

→立場を超えた丁寧な意見集約・「一緒にやってみる」

【石巻市のぞみ野】 情報・負担格差是正モデル

→情報格差の防止、複数関連団体を巻き込んだ意見出し

【名取市関上】 ステージ適応・拡大型モデル

→全戸配布での情報共有、施設＋予算＋人を徐々に拡大

ノウハウ

- 共通の目的・課題を設定した上での定期的な議論
- 組織や役職・立場にとらわれない、一市民としての意見を引き出す議論進行
- 組織のみではなく、住民末端までの意見を拾い上げる丁寧な意見集約
- 役員や固定メンバーだけが頑張らない、分担体制
- やらなければならないことだけではなく楽しいことを盛り込む工夫
- 住民と行政を繋ぐ中間団体により、悩み・専門性を翻訳し行動につなげる仕組みづくり
- 全員に伝える工夫により、情報格差を排除
- まちづくりに参画する意識づけ
- 活動資金の確保（地域活性化支援制度、県や民間の補助金）や、金銭負担のルール化を実施
- 他の地区の取組も知り、良いものは取り入れる

● 福島県「実践の場」概要

福島県では活動の内省・言語化や、各自の知見・技能を共有による相乗効果などを目的に、「生業の再生」「コミュニティ形成」「地域づくり」をテーマに意見交換を行うイベントを開催しました。

開催日時	2020年11月20日（金）13:00～17:00	開催場所	双葉郡楡葉町（Jヴィレッジ）
タイトル	ふくしまプラクティス2020 ― 実践者が語る10年の経験とこれからの挑戦 ―		
企画目的	<p>福島の復興は10年目以降も長い年月を要するため、現在活動中の担い手だけではなく、若い世代を中心に新たな担い手が増えることが不可欠である。</p> <p>挑戦的な活動の中で課題に直面することは多々あり、課題にどう対処したのか、どう考えたのかという、担い手自身から生じてくるものに知見としての価値が秘められている。</p> <p>挑戦的な活動をしている多様な担い手に自身の活動に関する内省、言語化をしてもらう機会を設け、各々の今後の活動への糧としてもらうことを目的とする。</p> <p>また、この機会を通じて前向きな気持ちで今も挑戦し続けている担い手の姿を発信することにより、県内外の、若い世代やかつて福島の復興に関わった経験のある層の関心をひきつけることも目的とする。</p> <p>加えて、多様な担い手が集まる機会を活かし、各自の知見・技能を互いに共有することにより刺激を生じさせ、相乗効果を得ることも目的とする。</p>		
実施内容	<p>13:00～13:10 開会挨拶・趣旨説明</p> <p>13:10～14:50 プレゼン</p> <ul style="list-style-type: none">● 生業の再生 (株)小高ワーカーズベース 和田さん／(株)浜のあきんど 和泉さん● コミュニティ形成 NPO法人ザ・ピープル 吉田さん／NPO法人ビーンズふくしま 中鉢さん● 地域づくり (一社)葛力創造舎 下枝さん／地域活動家 小松さん <p>15:00～16:30 意見交換（3テーマに分かれて実施）</p> <p>16:40～16:55 全体会（3テーマの意見交換結果の発表）</p> <p>17:00 閉会</p>		
規模	【登壇者・参加者】21人 【プレゼン傍聴者】当日視聴者 約50人（12月7日現在 延べ257回再生※）		

※ イベント終了後に動画を一部編集して再度公開したことにより、視聴回数がリセットされたため、webサイト上に表示されている視聴回数とは異なります

● 福島県「実践の場」概要 ― アウトプット [生業の再生]

「生業の再生」では以下のような発言・議論がありました。事業の目的となる課題・ミッション・ビジョンの明確化や、多様な主体が前向きに支え合える環境づくりがノウハウとして抽出されました。

当日の発言・議論の要点

- 被災地において、「糧」を得るための視点と工夫
 - ・ 地域が求めていることを考える
 - ・ **ミッションとビジョンの整合性を持つ（ミッションを実現させるための手段としてのビジネス）**
 - ・ 支えあえる環境づくり
 - ・ 小さくスタート（続けることは必ずしも重要でない）
 - ・ 無責任な人の100の意見より覚悟を持った1人行動が大事
 - ・ **自分のために働いている。地域の一人ひとりが幸せのために働いていることが地域のためにつながる**
- 3年後の生業とその可能性
 - ・ 福島の認知をさらに広げる（被災地と観光をどう親和性をもたせるのか）
 - ・ 内目線と外目線のコラボ
 - ・ **一人一人が自分らしく、誇りをもち、働ける場にする**

ノウハウ

- 事業の目的となる課題・ミッション・ビジョンの明確化
- 従業員一人一人の仕事と事業の目的との結びつきの明確化・フィードバック（地域への貢献しつつ利益につなげる）
- 多様な主体が前向きに支え合える環境づくり

● 福島県「実践の場」概要 ― アウトプット [コミュニティ形成]

「コミュニティ形成」では以下のような発言・議論がありました。やりたいことを中心に考えてやってみる、対等な関係での協働による巻き込み・フィードバックの獲得がノウハウとして抽出されました。

当日の発言・議論の要点

- ・ **コミュニティ形成の取組を進める際の教訓・ノウハウ**
 - ・ **まず自分と向き合う時間を持ち、何が必要か・なにをすべきかを考える（「やるべき」ではなく「やりたい」起点で）**
 - ・ 何が役立っているか・どの程度の支援が必要かを検証して改善（手伝いすぎない・やりすぎない）
 - ・ 無理しすぎない、自分たちが楽しむ
- ・ **各自の取組の今後目指すべき姿**
 - ・ **受け続ける支援から自立した支援へ**
 - ・ ひとりひとりが関わり合う（足りないから助け合う）
 - ・ 「福島で暮らせてよかったあ」と思えるように
 - ・ 楽しみながら継続
 - ・ **頼り・頼られ、互いに生きる人のつながり**

ノウハウ

- ・ コミュニティの一員として、自分がやりたいことを中心にまず考える
- ・ 必要だということをやってみることによって、深い課題が見えてきて、活動が広がっていく
- ・ 対等な関係性で協働することによる、コミュニティメンバーの巻き込み・フィードバックの獲得

● 福島県「実践の場」概要 — アウトプット [地域づくり]

「地域づくり」では以下のような発言・議論がありました。自分の興味があること・熱意を注げることを中心に取り組む、メディア活用、場の目的を限定・固定化しすぎないことがノウハウとして抽出されました。

当日の発言・議論の要点

- 「地域づくり」
= その地域との接点をつくること、接点を持てる“場”をつくること
- どんな人を、どう集めて、どう結び付けるかという工夫
 - ・ 各自のやりたいことファーストで考え、その実現のために計画・仕組みをつくる
 - ・ まずは自分が一生懸命にやる、そこから人が集まって、結び付きが生まれる
 - ・ メディア等を活用して主体的・積極的に発信する
 - ・ 難しいことを簡単に伝える（遊び心）
 - ・ 関係性をつくると何かが生まれ、その生まれたものを育てる
 - ・ 「等身大」の暮らしづくり
- 次の世代の地域づくり必要なこと
 - ・ 地域で大切な仕事をしているのに光の当たりにくい人にも感謝
 - ・ 自分がしてもらったことを次の世代に返していく
 - ・ 地域づくりを担う人が集まる“場”（無目的・非排除）をつくる

ノウハウ

- 自分の興味があること・熱意を注げることを中心に取り組む
- メディアを活用して各取組をオフィシャル化する
- 多様な方が関わりが持てるよう場の目的を限定・固定化しすぎない

異質なもののから多様性が生まれるため、
自分と違う人・存在と出会う場所を
作っていくことが「地域づくり」である